タイ・トウモロコシの調査団に同行して

野中耕一

はじめに

8月下旬に農林省から，元駐タイ日本大使館農務官長谷川善彦氏および長野県農業試験場桔梗ケ原分場長町田暢氏が「タイ国トウモロコシの将来」というテーマで来タイされ，約2週間にわたってタイ国のトウモロコシ栽培地帯を回られたが，わたくしもおふたりに同行し，それらの地帯を視察する機会を得た。なにぶんにも広い地帯をわずか2週間で回るという日程のために，十分な調査は困難であったが，それでも現地に直接足を踏み入れてみると，書物ではとうてい学ぶことのできない事実にふれることもできたりして，なかなか有益であった。そこで今回の調査旅行をふり返ってみて，そこで得られた印象を簡単にとりまとめてみたいと思う。

I

まず畑作農業の発展とその特徴について述べる。これまでタイ国の農業の中心的作物は米であった。また，国際商品としても米の位置はきわめて重要であった。それだけにタイ国農業を論じた書物も，どちらかといえば米作中心であった。米が国際商品としてはなばなしかったのに対して，畑作物は，国内消費，それも地場消費的な性格が強く，国民経済的規模で論じるほどには商品化が進んでいなかったためであろう。畑作は米作の陰にかくれていたといってよい。

しかし，今日ではタイの畑作農業は米作に比してまさるとも劣らない重要性をおびてきたといっても言いすぎではない。第1表をみればわかるように，タイ国で年々生産される畑作物は，米の生産総額とほぼ匹敵するだけのものをあげているのである。

第1表 畑作生産物の伸び（単位：100万バーツ）

	1957	1959	1961	1963
米	5,690.3	5,761.0	8,966.7	9,703.4
畑作物	4,275.0	5,748.7	8,051.6	8,388.2
畑作物/米	75	99	90	87

（出所） *Agricultural Statistical of Thailand*, 1964.

このような生産の上昇は，いったい何によってもたらされたものであろうか。一般的にいってつぎのことが考えられる。

(1) 米以外の農産物に対する海外からの需要が増加したこと。たとえばトウモロコシ。

(2) 国内の工業化に対する原材料の供給という必要が生じたこと。たとえば，綿，ジュート，ケナフ等。

(3) 経済水準の向上に伴って，果樹，蔬菜等の園芸作物の商品化が急速に進展したこと。

(4) そして最後に，これまではまだそれほど重要ではないが，今後ますます重要性をおびてくるであろうと思われるものの一つに，輪作作物の増加が考えられる。たとえば，緑豆。

ところで畑作農業の発展を示すものとして，これまで一般につぎの三つの指標がとられてきた。第1は作付面積の増加であり，第2に生産量の増加，そして最後に輸出量の増加である。第2～4表は，いずれも畑作生産が米作に比較して著しい増加をみせていることを示してい

第2表 野菜および果樹の伸び（単位：100万バーツ）

	1957	1963
野菜	220.9	867.5
果樹	399.7	1,576.6

第3表 作付面積の伸び（1950～53＝100）

	1950～53	1955	1957	1959	1961	1963
米	100	100	88	105	107	115
食用作物	100	129	188	285	353	503
採油作物	100	120	144	143	161	190
繊維作物	100	81	106	179	643	533

（出所） 第1表に同じ。

第4表 生産指数（1950～53＝100）

	1950～53	1955	1957	1959	1961	1963
米	100	119	107	108	168	182
トウモロコシ	100	151	245	592	1,250	1,696
緑豆	100	118	237	170	173	540
綿	100	131	175	172	209	203
ジュート	100	76	187	232	1,111	495
ケナフ	100	96	187	387	4,231	1,993

（出所） 第1表に同じ。

る。第5表は農産物の生産量と輸出量の関係を示したものである。右欄にはこの数年間の平均輸出率を示した。

ここに取り上げたものは，いずれも最近生産量の増加したものであるが，それぞれがさきに述べた最近の畑作農業の発展の特徴を示しているものとして興味深い。

まず，トウモロコシは最も急速な発展ぶりを示したものであるが，輸出率は83.5%にも達しており，その生産増加のほとんどは外部需要の伸びに対応しているといえる。これと正反対の性格を示すものが綿である。綿の輸出率はわずか0.4%であるが，これは国内の綿業に対する原料の供給として発展しようとしているからにほかならない。

上記2農産物に対して，ジュート，ケナフ，緑豆はやや中間的な性格を示している。ジュート，ケナフは国内の麻袋工業に対する原材料の供給と輸出需要に対応するものとがほぼ半々になっている。

緑豆は地力維持をかねてトウモロコシの後作として栽培されているので，トウモロコシの生産が増加すればするほど，それに付随して生産量が増加することが予想される。

ところで，以上述べてきた事実はこれまでタイ農業の多角化とか，タイ国輸出農産物の多角化という言葉で，これまですでに各所で紹介されたり，あるいは論じられてきたところである。

畑作農業を刺激する要因はこのようにいくつか考えられるが，このなかで国内の工業化あるいは経済水準の向上に対応する畑作農業の発展は比較的緩慢であり，またバランスのとれたものであるのに対して，外部からの刺激は一方的であり，したがってまた，タイ国の農業構造にかなり，はげしいインパクトをもたらさずにはおくまい。

それではいったい，タイ国の畑作農業地帯，もっと限定すれば，トウモロコシの主産地帯にどのような現象が，どのような変化が起こっているであろうか。今回の調査旅行で最も関心のあったのはこの点であった。

II

旅行の第1週目はまずメナム川流域の中央部のトウモロコシ地帯およびコーラート付近，第2週目はメナム中央平野北部およびパーサック川流域で行なわれた。ちょうど，トウモロコシの主産地形成の順序にほぼ従った形となった。

第5表　生産量と輸出量　（単位：1000トン）

	1955	1957	1959	1961	1963	(1955～63) 平均輸出率 (%)
米	1,237 *4,920	1,570 3,730	1,092 4,540	1,576 5,470	1,418 6,820	16.7
トウモロコシ	68.1 67.5	64.3 136.8	236.8 317.2	567.2 598.3	744.0 857.7	83.5
緑豆	10.5 34.2	10.5 41.2	15.4 45.9	26.4 40.6	20.7 116.0	33.2
綿	— 25.0	— 36.5	0.02 37.4	0.3 38.3	0.6 48.6	0.4
ジュートおよびケナフ	2.9 11.1	14.6 23.8	37.3 53.9	143.5 350.9	125.8 218.6	63.4

（注）上段が輸出量，下段が国内生産量。
　＊Paddy×67%で計算。
（出所）第1表に同じ。

タイ国のトウモロコシの主産地はおおざっぱにいって3地帯に分けることができよう。東北部のナコン・ラーチシマ付近，サラブリー，ロッブリー，ナコンサワンの3県を中心とするメナム川流域中央部，ペッチャブーンを中心とするパーサック川流域である。このうち現在の主要生産地帯はメナム川流域中央部でこの3県で全国生産のほぼ7割をしめており，ロッブリーからナコンサワンに至る道路の周辺には，乗用車で1時間～1時間半にわたって広大なコーン・ベルトを望むことができる。ナコン・ラーチシマは古くからトウモロコシ生産が行なわれていたが，現在ではもはや精根つき果てたという感じで，作柄も全般によくない。それにひきかえ，メナム上流へと燎原の火のように広がっていったトウモロコシのフロンティアー・ラインが，東へ一山越えて飛火したところがパーサック川流域であり，ペッチャブーン県，ノンパイ郡がその中心をなしている。ここはまさに現在，開拓が進行しているところで，われわれの最も関心をひいたところであった。

1.　目をみはるトラクターの普及

さて，これらの地帯にはいって最も印象的なことは，色彩あざやかなトラクターがあちこちで目にとまったことである。サラブリー県の生産の中心をなすプラプッタバードのニコム（入植地）には約2万3000世帯が入植しているが，このニコムだけで約400台のトラクターがはいっており，実に7世帯に1台の割合で普及していることになる。

これらのトラクターを購入する資金は，いったいどこ

から出たのであろうか。簡単な計算をしてみよう。

トラクター1台は約7～8万バーツといわれる。アタッチメントしだいでは10万バーツにもなりえよう。通りすがりの農夫に聞くと，いくばくかの頭金を出し，5000バーツの月掛けでほぼ1年半以内に完全に買い取っているという話であった。しかし，ここの世帯当たり平均所有面積は25ライ，ライ当たり平均収量30タン（1タンは20リットル≒15キログラム），今仮にキログラム当たりの価格を0.7バーツとすると，

25ライ×30タン×15キログラム×0.7≒7,870バーツ

となり，農事試験場で聞いた世帯当たり平均収入，6000～8000バーツという話とほぼ一致している。

これがトウモロコシ栽培による平均粗収入である。これでは粗収入をそのままそっくりつぎ込んでも，トラクター1台購入するのに10年間必要という計算結果になってくる。

しかし，ともかく，トラクターはとうとうたる勢いではいっているのである。通関統計のトラクターを，仮に全部農業用トラクターとすれば，1960年に7340万バーツであった輸入額は1963年には2億3540万バーツと，3年間で3倍以上に増加しているのである（第6表参照）。

第6表 農業機械の輸入 （単位：1000バーツ）

	1960	1961	1962	1963
農業機械	16,515	18,800	17,968	21,872
トラクター	73,340	119,083	129,024	235,401

（出所） *Import and Export of Thailand*, Dec., 1963.

このなぞを解くためには，いくつかの仮定をもうけて考えるほかはなさそうである。

その1は農民の資本蓄積が進むとともに，一方ではかなり大規模な土地所有者層が現われはじめているのではないかということ。

その2は外部から資本が流入しているのではないかということである。これには購入資金の貸付とトラクターのリース，賃耕，賃脱穀という二つの形が考えられる。

これら二つの形態は聞取りをしたかぎりではいずれも存在しているようである（ただトラクターのリースということは，現在の耕起の相場がライ当たり25～30バーツということを考えれば，あまり割りの合わない商売のように思われる）。

しかし，ともかくわたくしはここで，トラクターを自己資金で購入できるような農民層が現われはじめていることに注目したいのである。

2. 激しい労働力の流入

トラクターの流入と並んでさらに著しい現象は，フロンティアー・ラインにおける急激な労働力の流入であった。1947年から1960年にかけてタイの人口はほぼ50%増加しているが，地域別に見れば，米作地よりも畑作地における増加率が上回っている。それは米作地から畑作地への人口移動を物語っている。今回の調査旅行で訪問したペッチャブーン県のノンパイ郡は，正に目下開拓が進められている地域であるが，ここでの過去5年間の人口増加はまったく驚くべき数字を示している。すなわち，1961年に5400人であった人口は，63年には2万6000人，65年には実に6万9000人と急膨張したのである。これらの労働者群は，71県中ほぼ全国にわたる54県から流入しているという話であった。

これらの労働者群は，開墾もしくは土地の購入（ライ当たり50バーツ）によりこれらの地域に定着しようとしているわけである。ノンパイの郡役場のある役人は「ここの森林原野は国有地で道路から2キロメートルまでの開墾が許されているが，泥棒たちは21キロメートルまではいり込んで開墾している」，「しかし，50バーツの罰金を出せばいいんだ」とこともなげにいってのけたが，このことが法律ではどうにもならない労働者群の流入と開拓ラッシュのすさまじさを物語っている。

この地での特徴的なことは，すでにブルドーザーやトラクターを所有してどんどん林野の開墾を進めている農民層と，そこにはいり込んで働いている農業労働者の層の差がはっきりしていることである。ある農民はブルドーザー2台をもってすでに2000ライの開墾をしたと得意気に話していた（もっともかれはトラクターを持たないために50ライしかトウモロコシを栽培していないという話であった）。またある農民は2台のトラクターでトウモロコシの大農場を経営していた。このような富裕な農民層は，一般的にいってかなり以前にこの地へ移動してきたものが多い。それにひきかえ，いわゆる新参者は一方で開墾を進める一方，これらの農場で1日10バーツぐらいの労賃で日雇労働者として働いているようだ。トウモロコシの栽培は収穫時にかなりの労働力を必要とするので，これらの農業労働者の中には季節労働者として流入してきている者も相当あるのではないかと思われる。

ともかく，この地は目下開墾ラッシュである。現在開かれているのはパーサック川以西だけであって，パーサック川以東にはまだ広大な処女地がねむっている。Feeder

Road さえつけば，この地の開発も急速に広がっていくことが予想される。開墾には相当の資本を必要としており，新田開発によって大土地所有者の出現する可能性が十分に考えられる。

3. 地場産業の萠芽

以上のような資本，労働力の大規模な流入は，トウモロコシ栽培に伴ってみられる最も顕著な現象であるが，さらにもう一つ見落としてならないことは，これに伴って，いわゆる地場産業の萠芽が生まれつつあることであろう。最も手近な例としては農機具の修理工場があげられる。村の鍛冶屋といった規模のものはいたるところに見うけられるが，なかにはトラクターの十数台を同時に修理できるような町工場まで見られた。もう一つの例としては，トラクターのアタッチメントの一つとなる脱穀機の製造があげられる。ちょうど，刈入れ，脱穀の時期であったために，道すがらいたるところで脱穀しているのに出あった。ほとんどが賃脱穀で（1タン当たり50サタン），脱穀機が各農家を巡回しているようであった。この脱穀機はすべて地場製品であった。1時間3000キログラムの処理能力を持っているそうであるが，同行の町田氏の説明によれば，非常に優秀な機械であるとのことであった。地方農産物を原材料とする軽工業，たとえば製糖，製麻袋工業がすでに成立しつつあるが，農業を中心とするこれら前方，後方の諸連関産業が，畑作農業を中心として動きはじめようとしていることに注目せねばなるまい。

4. 貨幣経済にまき込まれる畑作農業

一般に農民は，米に対して強い執着を持っている。それは自己の食料だけは確保できる，ともかく生命の維持だけはできるという一種の本能であろうか。そして，そのことが，米作農民を非常に保守色の強いものにしている。

これに対して畑作農は自己の生産した農作物の商品化によって，生活資材および生産資材を購入せざるをえない。畑作農業は急速に貨幣経済に巻き込まれていく運命を負わされている。畑作農はいわば待ったなしの立場に追い込まれているといってよい。そしてそのことが畑作農民を一般に進歩的なものにさせている。その気風は農民だけでなく，役人にまで反映しているように思われた。一般に米作地の各県庁には米作担当者と畑作担当者のふたりの役人がいて，7～8の郡の指導，監督を行なっているが，その組織も貧弱であれば，それを行なう役人も無気力に近い。しかし，畑作地帯の県庁の農業部は規模も組織も大きく，また働いている役人の活気も米作地とは比較にならぬほどのものがあるように思われた。

ともかく，生産物は高く売らねばならぬ。生活必需品や生産資材は安く買わねばならぬ。トウモロコシの後作には何を作ったらよいか，地力の維持はどのようにしてはかったらよいか。かれらは真剣にこれらの問題にとり組まざるをえない。

畑作農業を米作農業ときっぱり区別するものは，かれらがすべてを金銭を通して考えなければならないことであろう。

その意味においても，最近のタイにおける農業の拡大は米作農業の世界とはまったく異質な経済圏が広がっているということである。

5. 豊富な食料と安い労賃

トウモロコシ栽培は農村に大きな変化をもたらしながら，奥へ奥へと進んでいる。今まで水が来なくて利用不可能だった高地にも，水運の便がなく開発不可能だったパーサック流域にもトウモロコシ栽培はとうとうたる勢いで広がっている。

ところでこれまでトウモロコシ栽培がどこまで伸びるかということについては，運賃コストが一つのネックだと考えられていた。奥地へ行けば行くほど運賃コストはかさんでくる。そこで人々はいつかは採算のとれない限界にぶつかると考えた。しかし，そうした人々の期待はこれまでのところことごとく裏切られてしまった。過去のタイの農業では水運の便がないところの利用はとうてい考えられなかった。しかし，今やトラック輸送による農業さえ成立しはじめている。

その秘密の一つは食料価格の安さにあると考えたい。なるほど，奥地へ行けば行くほど運賃コストに応じてトウモロコシの庭先価格は低下し，農民の手取りは減少する。しかし，価格の下がるものは何もトウモロコシに限られているわけではない。米をはじめその他の農産物の価格も下落するのである。収入のほとんどを食料の購入にあてているこの国の農民にとって，食料価格の高低はそのまま労賃の高低につながっていると考えてさしつかえあるまい。現在，タイのトウモロコシ栽培のほとんどが略奪農耕の性格をそなえている。施肥はもちろん行なわれていない。後作に緑豆を栽培することによってかろうじて地力の低下速度を押えているにすぎない。そのような状態では，トウモロコシ栽培の現金費用の多くの部分は支払労賃でしめられることになる。そして労賃コストの低下はそのままトウモロコシ・コストの低下につな

がってくる。

この国の食料の豊富さは目を見はるばかりである。タイのことわざに「資産，財貨は水と土の中にあり」というのがあるが，実際はほとんどが水の幸であるといってさしつかえない。水のあるところでは食料はきわめて安い。東北地方はフレンドシップ・ハイウェーが開通して以後，市場への接近条件はきわめて有利なものになった。しかし，この地は土壌が痩せている上に水の幸がきわめて少ない。食料品の数が少なく高価である。この意味において東北地方は二重の苦しみを背負っている。このことが東北地方へのトウモロコシの波及を押えている理由の一つではあるまいか。

食料品の安さ，労賃の安さがタイのトウモロコシ生産費を安くしている大きな理由であるとすれば，現金費用のなかにしめる労賃コストの低下は，ゆゆしき問題である。すでに開墾耕起，脱穀の段階でかなり機械力が導入されており，それらのコストもかさみ始めている。しかし，問題はそれよりも肥料であろう。新開地は別として各地で土地の疲労がめだちはじめている。また農民も4～5年さきには肥料が必要になるだろうと考えはじめている。肥料を入れるようになれば肥料コストは当然現金費用の中で大きな比重をしめるようになるであろうし，労賃コストはその分だけ低下することになる。その時は現在のような放慢な経営は許されなくなるのではなかろうか。そして，その日もそう遠くはないというのが実感であった。

III

現在，バンコック市内は空前の繁栄ぶりを示している。町々に輸入製品があふれている。町にはまるで国際ショウを見るかのように各国の自動車が走り回っている。その中にあって，日本の車も驚くほど進出している。しかし，それとはまったく対照的に，今回の調査旅行ではついに日本製トラクターに1台もお目にかからなかった。フォードやマッシューファガソンなどのトラクターがコーン地帯を席巻しているのに，日本製トラクターが1台も見当たらぬのは何といっても寂しかった。

日本は農業用トラクターの面ではかなり立ち遅れているという話は聞いたが，現地の農民の間では，日本製トラクターを，何とかして手に入れたいという声が聞かれた。ペッチャブーン，ノンパイ郡の農民がトウモロコシとの交換で3～5年の決済でなんとか日本製トラクターが手にはいらぬものかと何度も執拗に食いさがってきたことが今でも目に浮かぶ。同じように，品種や施肥技術に関しても，日本の技術協力を望む声は大きかった。いろいろと困難はあるにしても，日本の経済協力のあり方として，現地の声を取り入れる方向がまだまだ残されているような気がした。

（海外派遣員）

―― 在バンコック ――